

する事を味噌をつけるといふ、これは太平記卷の三十五に見えたり、桃井直常敗軍の段に、當時の人の落首なりとて、唐橋や鹽の小路の焼しこそ桃井殿は鬼味噌をすれといふ狂歌を載たり、この下の句の味噌をすれといふは、今俗に味噌をつけるといふ事と聞ゆ、直常は勇敢無雙の大將にて、世人鬼桃井と稱せしとぞかゝる人の狼狽したれば、鬼味噌をすれとはいふならん、村酒を鬼ころしといふごとく、鬼味噌とは蕃椒味噌の事にや、上の句にから橋とおきて、からき鹽とつゞけ、小路を麴にかけて、焼し鬼味噌とつゞけたれば、鬼味噌は蕃椒味噌の事と聞ゆる也、又食物の赤くて、その味の鹹きを鬼といふ、鰯を醬油の漬焼に、たるを、鬼から焼といふ類おほかり、〔海人藻芥〕二條殿故攝政其基仰云、大人ノ輕々シキハ小人ノ重キニハ劣レリ、大人ハ物ヲ見ル事虎ノ如クニシ、歩ム事ハ牛ノ如クニスト云本文有云々、去ナガラモ上臈ノ上臈シキト、味噌ノ味噌クサキハ下品ナリ、御利口有ト云々、

鼓

〔新撰字鏡〕支鼓市至反、去、鳥頭也、久支、

〔本草和名〕米十穀鼓豆音是義反、和名久岐所作也、

〔倭名類聚抄〕十六鼓釋名云、鼓是義反、和名久岐、五味調和者也、

〔箋注倭名類聚抄〕四原書作鼓嗜也、五味調和、須之而成、乃可甘嗜也、此恐誤、○中按說文、菘配鹽

幽未也、鼓俗菘、从豆、段玉裁曰、廣雅說飲食云、鬱幽也、幽與鬱同義、以豆鬱之、齊民要術說作鼓、必室中溫暖、所謂幽未也、云食經造鼓法、用鹽五升、所謂配鹽也、依之今俗呼納豆者近之、

〔事物紀原〕九酒醴飲食、鹽鼓

廣雅曰、苦李作鼓、廣志曰、苦秦鼓、則鼓自一物爾、謝承後漢書羊續爲南陽太守、鹽鼓共器、三輔決錄曰、南陽舊語曰、前隊太守范仲公、鹽菓蒜業共一筒、史記貨殖傳曰、孽麴鹽鼓千答、蓋四物也、今京俗